

# ダンマパダ註釈書の研究に関する一考察

香 月 拓

(2024年2月29日受理)

## A Study on the Dhammapada commentary

KATSUKI Taku

要旨：本稿はパーリ語文献『ダンマパダアッタカター』の序偈と第100偈、さらに巻末を読み解きながら、その特徴や類似經典との関係などについて考察したものである。『ダンマパダアッタカター』の著者や他のパーリアッタカターとの成立順の問題に関しては、部分的なところで論じているものがほとんどで、まだ不確定な部分が多い。しかし、多くのパーリアッタカターが徹底した語義解釈を中心としているのに対して、『ダンマパダアッタカター』には数多くの因縁物語が含まれているという大きな特徴がある。また、『ダンマパダ』の偈のほとんどは比丘に対して説かれたものであるが、その偈を説くに至る因縁物語の登場人物は様々で、仏教に帰依する前の男性や優婆塞といった在家者も多数登場する。それらの物語を読み解いていくことで、苦悩と信との関係性や仏道が開かれるまでの経緯が明らかになってくる。

Key words：ダンマパダ ダンマパダアッタカター ブッダゴーサ 法句経 法句譬喻経

### 1. はじめに

『ダンマパダ (Dhammapada)』(以下Dhp)は、現存する經典の中で最古の部分に属すると考えられていて、近代ではアジアだけでなく西洋の言語にも多く翻訳されている。その註釈書である『ダンマパダアッタカター (Dhammapada-Atthakathā)』(以下DhpA)は、スリランカ上座部マハーヴィハーラ (Mahāvihāra) 派によって伝えられてきたものである。そこには、比丘・比丘尼や仏教に帰依する在家者など様々な人の生きる姿が語られている。そこで、本稿ではDhpAの構成や特徴をあきらかにしつつ、類似する經典および註釈書との関係や著者についての考察を行う。

### 2. DhpAについて

#### 2.1 DhpAの構成と内容

Dhpは全26章423偈から成る經典であり、DhpAはDhpの一偈あるいは数偈をまとめて一つの因縁物語が成されていて、Dhpと同じ全26章で305の因縁物語が語られている。おおまかに分類すると、各物

語はまず釈尊が誰に関して語られたものであるかを述べ、次に因縁物語、Dhpの偈、そして偈の語義解釈と続く。また、話の中には因縁物語とそれに関する過去物語が語られたものもある。因縁物語の人物は比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・神・バラモンやその他の在家者まで幅広く登場する。

DhpAのテキストとしては、PTS (The Pāli Text Society) から以下のものが出版されている。

*The Commentary on the Dhammapada* edited by H.C.Norman, London. PTS. vol.I, 1906: vol.II, 1911: vol.III, 1912: vol.IV, 1914

また、英訳では以下のものが出版されている。

*Buddhist Legends, Dhammapada commentary* by Eugene Watson Burlingame, Harvard Oriental Series, vol.28-30, Cambridge, Harvard University Press, 1921

和訳は部分的な訳や要約として水野 (1981) と北島 (2000)、片山 (2009) が挙げられる<sup>1-3)</sup>。その中でも、北島 (2000) はDhpの原文、和訳、英訳を並べ、DhpAの因縁物語部分の概要を紹介している。

水野（1981）は、Dhpとそれに関連する經典や註釈書の対照表を作成している。さらに近年、DhpAの研究を大幅に進めることになるであろう全訳本が及川（2015～2018）、松村（2021）と続けて出版されている<sup>4-5)</sup>。

## 2.2 他の經典や註釈書との関係

Dhpの漢訳として『法句經』がある。これはDhpを中心にして、『ウダーナヴァルガ (Udānavarga)』（以下Udv）などを加えていったものである。この『法句經』の註釈書として『法句譬喻經』がある。Udvは説一切有部で編纂されたサンスクリット語の經典であり、この註釈書には漢訳の『出曜經』がある。斉藤（1972）はDhpA、『法句譬喻經』、『出曜經』の三者において、中には同じ物語が伝えられているものもあるが、偈文と物語が一致しているものは極めて少ないと述べている<sup>6)</sup>。

多くのパーリアッタカターが徹底した語義解釈を中心としているのに対して、DhpAは因縁物語の豊富さにおいて『ジャータカアッタヴァンナナ (Jātaka-Aṭṭhavaṇṇanā)』（以下JA）に匹敵するものである。ただし、JAは釈尊の前生物語が主となっているが、DhpAの場合は、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・在家者などの現在物語が主となっている。斉藤（1972）は、DhpAとJAとは共通する物語が多く、DhpAの50以上の物語が関係を持っていると述べている。

また高橋（1987）は、DhpAの語義解釈と他のパーリアッタカターとを比較した場合、DhpAはダンマパーラの作とされる『ウダーナアッタカター (Udāna-Aṭṭhakathā)』（以下UdA）や『テラガターアッタカター (Theragāthā-Aṭṭhakathā)』、『イティヴッタカアッタカター (Itivuttaka-Aṭṭhakathā)』などと一致するものやDhpAの解釈に手を加えたと思われるものが多いため、DhpAがダンマパーラに先行するものであると論じている<sup>7)</sup>。

## 2.3 著者の問題

DhpAの巻末には次のように記されている。

【PTS, DhpA, vol.IV, p.236】

・・・theravaṃsapadīpānaṃ therānaṃ

mahāvihāravāsīnaṃ vaṃsālāṅkārabhūtena vipulavisuddhabuddhinā buddhaghoso ti garuhi gahitanāmadheyyena katā ayaṃ dhammapadassa atthavaṇṇanā.

・・・上座部の伝統の灯であるマハーヴィハーラ派に属する長老たちの中で伝統を莊嚴するものとなった、広大で清浄な智慧を持ったブッダゴースという、師たちによって与えられた名前を持った者によって、このダンマパダの註釈書が作られた。

著書については巻末にブッダゴースと明確に記されているが、用語と形式の点に於いて異なっている部分が多く見られることから、ブッダゴースを著者とすることを疑わしいとする説もある<sup>8)</sup>。ノーマンはDhpAの序文で、語義解釈の部分をブッダゴースの作であるとし、因縁物語の部分はそれより後の編纂者の手によると述べている<sup>9)</sup>。また高橋（1987）は、DhpAはブッダゴースの真作として見られている『サマンタパーサーディカー (Samantapāsādikā)』などの解釈を意識していたとは思われるが、独自のより発展した見解を示しているとして、DhpAの語義解釈もブッダゴースの作とは思われないと論じている。

馬場（2008）はブッダゴース以前の註釈と、彼自身が編纂した部分とを判別し、ブッダゴースがマハーヴィハーラ派の伝統を掲げて三蔵を確定することで大乘仏教の思想を受け入れなかったことを論じている<sup>10)</sup>。したがって、三蔵として確定された經典は変えずにDhpAなどの註釈書で大乘の思想を組み込んでいった可能性も考えられる。仮にDhpAの中に大乘仏教の思想を見ることができれば、DhpAはブッダゴースの作ではなく、それ以後に作成された註釈書という可能性も出てくる。しかし、DhpAの著者や他のパーリアッタカターとの成立順の問題に関しては、部分的なところで論じているものがほとんどで、まだ不確定な部分が多い。

## 3. 序 偈

ここでは序偈を扱いながら、このDhpAを作成するにあたっての著者の姿勢や経緯を見ていくことにする。

【PTS, Dhpa, vol. I, pp.1-2】

まず、仏・法・僧の三宝への帰依から始まり、次にパーリ語で作成された理由と著作態度が述べられている。

‘paramaparābhatā tassa nipuṇā atthavaṇṇanā,  
yā tambapaṇṇīdīpamhi dīpabhāsāya saṇṭhitā,  
「代々保持されてきたその深遠な註釈書、  
それはセイロン島で、島の言葉で構成されており、

na sādhayati sesānaṃ sattānaṃ hitasampadaṃ,  
appevanāma sādheyya sabbalokassa sā hitaṃ.’  
〔セイロン島〕以外の衆生の利益成就になっていない、  
しかし必ず一切世間の利益になるべきである」

iti āsiṃsamānena dantena samacārinā  
kumārakassapenāhaṃ therena thiracetasā,  
と、私は、〔自己を〕抑制し正行者であり、  
堅固な心を持つクマーラカッサ長老の希望により、

saddhammaṭṭhitikāmena sakkaccaṃ abhiyācito,  
taṃ bhāsaṃ ativithāragataṃ ca vacanakkamaṃ,  
正法が久住することをうやうやしく懇願されました。  
極めて詳細な様子と言語の順序とを

pahāyāropayitvāna tantibhāsaṃ manoramaṃ,  
gāthānaṃ vyañjanapadaṃ yaṃ tattha na vibhāvitam,  
除き、適当な經典の言葉にして、  
そこで説明されていない偈の文字と言葉、

kevalaṃ taṃ vibhāvetvā sesaṃ tam eva atthato,  
bhāsantarena bhāsissaṃ āvahanto vibhāvinam,  
manaso pīṭipāmojjaṃ atthadhammūpanissitaṃ ti.  
それを全て説明して、その残りのみを意味のから  
明智の人に意味と法にもとづく心の喜びをもたら  
しながら、  
別の言葉(パーリ語)によって、私は語りましょう。

以上のことからわかるように、DhpAにも他のパーリ註釈書と同様に、セイロン（スリランカ）の言葉

で書かれた「シーハラ・アッタカター」が存在していて、それを源泉資料としていることがわかる<sup>11)</sup>。しかしDhpAの物語には、もともとインドで語りつがれていたものがスリランカに伝えられた物語もあれば、後にスリランカで加えられた物語もあると考えられる。クマーラカッサ長老の「正法が久住するためにセイロンの言葉からパーリ語に翻訳してほしい」という願いにより、パーリ語のDhpAの作成が始まった。これによってインドや南アジアに伝わったのならば、パーリ語にすることがそのまま一切世間の利益になるといえる。

## 4. Dhpaの特徴

### 4.1 登場人物

北島（2000）を参考にして、DhpAの登場人物を調べてみた。Dhpの偈はまれに在家者に対して説かれるものもあるが、そのほとんどは比丘に対して説かれたものである。しかし、その偈を説くに至る因縁物語の登場人物は様々である。一番多いのはやはり比丘である。サーリプッタやマハーモッガラナ、アーナンダなどは何度も登場し、仏弟子になる時の話や入滅する時の話も語られている。また、仏教に帰依する前の男性や優婆塞といった在家者も多数登場し、比丘と合計すると全因縁物語の半分以上を占める。ウデーナ王のようにその生涯が語られているものもあれば、仏教を信仰することなく、死後、地獄に転生する人物が語られるものもある。性別に関して、女性は男性ほど多くはないが、それでも比丘尼、優婆夷、仏教を信仰する前の女性などに関して語られている。キサーゴータミーが子供を亡くして出家した時の話や、自分の子供たちにうとまれて出家した女性の話など、女性に関しては世間の苦しみから逃れるために出家をする人が多いことがわかる。また、身分も様々で、バラモンやクシャトリーヤという身分の高い人たちから、癩病患者や屠牛者という人たちまで登場する。これらのことから、いかに釈尊や仏弟子たちが身分や性別に関係なく、多くの人に対して法を説示していたのかがわかる。

そのような人々が釈尊や仏弟子たちに出会い、どのような変化があったのかを見ると、比丘は阿羅

漢果を得ることが多く、在家者は預流果を得ることが多い。在家者に関して言えば、預流果を得た後に出家をして比丘・比丘尼になる人や、優婆塞・優婆夷になる人など様々である。中には、仏教を信仰していなかった者が釈尊に出あい、阿羅漢果を得たという話もあったが、在家者が阿羅漢果を得た場合には、その後死ぬか出家をするかのみであった。

#### 4.2 Dhp,100偈に対する註釈

では実際にDhpAがどのように説かれているのかを一つの因縁物語によって考察していく。ここではDhp,100偈の註釈であるDhpA, VIII-1「tambadāṭhikacoraghāthakavatthu」を取り上げる。

【PTS, DhpA, vol. II 「tambadāṭhikacoraghāthakavatthu」, pp.203-209】

sahassam api ce vācā ti imaṃ dhammadesanaṃ  
satthā veḷuvane viharanto tambadāṭhikacoraghātakam  
ārabha katesi.

ekūnapañcasatā kira corā gāmaghātakādini karontā  
jīvikam kappesum. ath' eko puriso nibbiddhapiṅgalo  
tambadāṭhiko tesam santikam gantvā ' aham pi  
tumhehi saddhim jīvissāmī ' ti āha.

たとえ千語でもというこの法の説示を、師が竹林精舎に住しておられる時に、タンバダーティカという盗賊の死刑執行者（coraghātaka）に関してお説きになった。

499人の盗賊たちが村を破壊するなどしながら生活をしていたと伝えられている。その時、みにくい褐色のタンバダーティカという一人の男性が、彼らの近くに行って「私もあなたたちと共に生活したい」と言った。

このように、まず初めに釈尊がどこで、誰に関して語っているのかが述べられ、その後に因縁物語が始まる。

彼の残酷さを知っている盗賊の頭は、一度は彼を断った。しかし、タンバダーティカは頭の側近にうまく取り入り仲間になったのである。しかしある日、

盗賊団は捕まって死刑を宣告された。ただ、誰も死刑執行者がいなかったので、盗賊たちに「彼らを殺せばあなたは助かり、尊敬も得るだろう」と言ったところ、タンバダーティカのみが同意した。こうしてタンバダーティカは盗賊の死刑執行者となり、自分の生命と尊敬を同時に得たのである。

その後、彼は55年もの間、盗賊の死刑執行をすることで生活していたが、高齢になり仕事を解雇されてしまった。その日、タンバダーティカは托鉢中のサーリプッタ長老を見て、初めて清らかな心が起こり、サーリプッタ長老に礼拝をして乳粥を施した。

thero tassa anumodanam ārabhi, so attano cittaṃ  
therassa dhammadesanānugam kātuṃ nāsakkhi. therō  
sallakkhetvā ' upāsaka kasmā cittaṃ desanānugam  
kātuṃ na sakkosī ' ti. ' bhante mayā dīgharattaṃ  
kakkhaḷakammaṃ kataṃ, bahū manussā mārītā,  
tam ahaṃ attano kammaṃ saranto cittaṃ ayyassa  
desanānugam kātuṃ nāsakkhiṃ ' ti. therō ' vañcessāmi  
nan ' ti cintetvā, ' kiṃ pana tvaṃ attano ruciyā  
akāsi, aññehi kārīto ' sī ' ti. ' rājā maṃ kāresi bhante  
' ti. ' kin nu kho te upāsaka evaṃ sante akusalaṃ  
hotī ' ti. muddhadhātuko upāsako ' theren' evaṃ  
vutte natthi mayhaṃ akusalan ' ti saññī hutvā ' tena  
hi bhante dhammaṃ kathethā ' ti. so there  
anumodanam karonte ekaggacitto hutvā dhammaṃ  
suṇanto sotāpattimaggaṃ orato anulomikaṃ khaṇṭhiṃ  
nibbattesi, therō pi anumodanam katvā pakkāmi.  
upāsakaṃ theram anugantvā nivattamānam ekā  
yakkhiṇī dhenuveṣana āgantvā ure paharivā māresi.  
so kalam katvā tusitapure nibbatti.

長老は彼のために祝福の言葉を始めた。〔しかし〕彼は自分の心を長老の法の説示に随順することができなかった。長老は〔彼の様子を〕観察して「優婆塞よ、なぜ心を〔法の〕説示に随順することができないのか」と〔言った〕。「尊者よ、私によって長い間残酷な行為がなされました。多くの人々が〔私に〕殺されました。私はこの自分の行為をおもうと、心を聖なる〔法の〕説示に随順することができないのです」と〔タンバダーティカは

言った。長老は「私はだまされていないだろう」と考えて、「さて、あなたはそれを自分の欲でしたのですか、他の人々にさせられたのですか」と〔言った〕。「尊者よ、王が私にさせました」と〔タンバダーティカは言った〕。「優婆塞よ、あなたがこのようであるならば、一体どうして不善であるのか」と〔サーリプッタは言った〕。迷っていた優婆塞は「長老にこのように言われた、私には不善はない」という思いが出てきて、「それでは尊者よ、法を説いてください」と〔言った〕。彼は長老が祝福の言葉を話す間、穏やかな心で法を聞きながら、この迷いの世界から預流道(sotāpattimagga)に随順する信(khanti)が生じた。長老もまた、随喜して立ち去った。優婆塞は長老に付き添った後、〔家に〕戻るとき、ある夜叉女が牝牛に化けてやって来て、〔タンバダーティカ〕の胸を打って殺した。彼は死後、兜率天に生まれた。

この因縁物語の中では、なぜ夜叉女が化けた牝牛に殺されたのかという過去の因縁は語られていない。しかしDhp,66偈の註釈であるDhpA, V-7<sup>12)</sup>の過去の因縁の中にタンバダーティカという名前が登場する。そこには、昔、ある遊女と快樂に耽った後、その女の人を殺して宝石類を奪った四人の若者のうちの一人がタンバダーティカであると記されている。また、このDhpA, V-7と同様な内容の因縁物語がUdA, V-3<sup>13)</sup>でも語られている。

その後、比丘たちがタンバダーティカの転生先に関して議論をしていると、釈尊がやって来て兜率天に生まれたことを伝えた。

‘ kiṃ bhante vadetha, ettakaṃ kālaṃ ettake manusse ghātetvā tusitavimāṇe nibbatto ’ ti. ‘ āma bhikkhave mahanto tena kalyāṇamitto laddho, so sārīputtassa dhammadesanaṃ sutvā anulomañāṇaṃ nibbattetvā ito cuto tusitavimāṇe nibbatto ’ ti vatvā imaṃ gātham āha :

‘ subhāsitaṃ suṇitvāna nagare coraghātako  
anulomakhantiṃ laddhāna modati tidivaṃ gato ’ ti.  
‘ bhante anumodanakathā nāma na balavā, tena  
kataṃ akusalakammaṃ mahantaṃ, kathaṃ tattakena

visesaṃ nibbattesī ’ ti. satthā ‘ kiṃ bhikkhave mayā desitadhammassa appaṃ vā bahuṃ vā pamāṇaṃ mā gaṇhatha, ekavācā pi hi atthanissitā seyyo evā ’ ti vatvā anusandhiṃ ghaṭetvā dhammaṃ desento imaṃ gātham āha :

100. ‘ sahaṃsaṃ api ce vācā anattapadasaṃhitā

ekaṃ atthapadaṃ seyyo yaṃ sutvā upasammāti ’ ti.  
「尊者よ、何をおっしゃるのですか。これだけの時にそれほど多くの人々を殺して、兜率天にうまれたのですか」と〔比丘たちは言った〕。「比丘たちよ、その通りである。偉大な善知識が得られたことによって、彼はサーリプッタの法の説示を聞いて随順する智慧が生じたので、こ〔の迷いの世界〕より死んだ後、兜率天に生じたのである」と言って、この偈を言った。

「町で盗賊の死刑執行者は善き語を聞いて〔法に〕随順する信を得て、喜悅し三十三天に行った」と。

「尊者よ、〔その〕随喜の話には力はありません。彼によって多くの不善な行為が為されました。どうやってそれだけで勝れた〔智慧〕が生じたのですか」と〔比丘たちは言った〕。師は「比丘たちよ、私が説示した法に関して、少ないとか多いとか、分量ではかつてはいけない。一つの言葉といえども、利益を持つものはより勝れたものとなる」と言って、結論を導き出して、法を説示しながらこの偈を言った。

100. 「たとえ千の無益な言葉があろうとも聞いて〔心が〕静まる一つの利益ある言葉〔の方〕がより勝れている」と。

このように、Dhpの偈が説かれるに到った経緯が語られ、その後でDhpの偈が説かれるのである。タンバダーティカは盗賊の死刑執行という仕事を解雇されて初めて罪の意識が出てきた。そんなタンバダーティカに対して、サーリプッタはまず罪の意識を消そうとするところから始めている。これによってタンバダーティカは落ち着きを取り戻し、預流道という阿羅漢へ到る道に入って行けたのであろう。サーリプッタという善知識に出あい、苦悩を因として

信をおこしたところに仏道が開かれたことがわかる物語である。

この後はDhpの偈に対する語義解釈がなされている。そして最後に、この偈が説かれた人物の変化が語られる。この話では釈尊の説法のより多くの比丘たちが預流果などを得たと語られている。

#### 4.3 DhpAと『法句譬喻經』との関係

Dhp,Ⅷ「sahassavagga」の十六偈(Dhp,100-115)と『法句經』第十六「述千品」とは、順序も内容も相応している。Dhp,100偈に対応する『法句經』の偈は次のものである。

雖誦千言 句義不正 不如一要 聞可減意<sup>14)</sup>

千言を誦すと雖も、句義正しからずんば、一要の、聞きて意を減す可きには如かず。

したがって、『法句經』第十六「述千品」はDhpから訳されたといえる。また、Dhp,100偈では千の言葉を聞くのか、或いは語るのか判断しづらいが、漢訳では明確に「千言を誦す」と説かれている。しかし、それぞれの註釈にあたる部分をDhpAと『法句譬喻經』から見ると、その内容は全く異なっている。ここで、『法句譬喻經』の該当部分<sup>15)</sup>の概略を以下に示す。

〔周利〕般特<sup>16)</sup>という長老比丘は愚かで三年間で一つの偈を覚えることもできなかった。ある時、釈尊が「口を守り、意を摂め、身は非を犯すこと莫れ。是の如く行ずれば、世を度することを得る」という一つの偈を授けた。そして、その偈の説明<sup>17)</sup>をすると、般特はたちまちに阿羅漢道を得た。その後、比丘尼たちにその偈を説くなどしていると、波斯匿王に「般特の本性は愚鈍にして、まさに一偈を知るのみと聞く。何に縁りて得道せるや」と問われ、釈尊が説いたものが『法句經』の偈である。

DhpAがタンバダーティカという盗賊の死刑執行人に関する物語なのに対して、『法句譬喻經』はDhp,100-102偈に相応する三つの偈の註釈として周利般特(チューラパンタカ)に関する物語が語られている。しかし、DhpAの100-102偈に対する註釈は

全てチューラパンタカとは別の因縁物語である。

DhpAにもチューラパンタカの物語はDhp,25偈の註釈としてあるが、これは釈尊に一つの偈を授けられるのではなく、拭き掃除を命じられて世の無常をさとり阿羅漢果を得るまでの物語である。さらに、Dhp,25偈に相応する『法句經』の偈は第十「放逸品」に見ることができるが、『法句譬喻經』で語られるその因縁物語に相応するDhpAの物語は見当たらない。この様にDhpと『法句經』が多くの部分で一致するのに対して、DhpAと『法句譬喻經』とは、因縁物語の数も異なっており<sup>18)</sup>、内容も一致しているものは極めて少ないといえる。

#### 5. おわりに

Dhpの偈はほとんどが比丘に対して説かれたものであるが、その因縁は実に様々である。そしてDhpAの特徴として、偈が説かれるに至った因縁物語が語られていることが挙げられる。そこには、比丘・比丘尼のみならず優婆塞や優婆夷の生涯も多数語られている。これらの因縁物語を読み解いていくと、苦悩と信との関係性が明らかになってくる。釈尊や仏弟子たちの言葉を聞いて、人々は自らの生活や苦悩を因として仏教に帰依をして仏道を歩み始める。そして人それぞれ違った仏教に帰依する動機があるということは、仏教に帰依した人や出家した人たちの数だけ仏教との出あいがあるということでもある。その中には苦しみでしかなかった自分の人生の意味が変わるような出あいもあるだろう。このような出あいや仏弟子たちとの関わりを幅広く見ることにより説法のあり方や形式、さらに比丘や比丘尼、在家者の状況や仏道というものが見えてくると考えられるが、それについては今後の課題としたい。

#### 註

- 1) 水野弘元『法句經の研究』春秋社(1981)
- 2) 北島泰観『一こころの清流を求めて—パーリ語仏典 ダンマパダ』ウ・ヴィッジャーナング大長老監修 中山書房仏書林(2000)
- 3) 片山一良『ダンマパダ全誌解説—仏祖に学ぶひとすじの道』大蔵出版(2009)
- 4) 及川真介『仏の真理のことは註—ダンマパダ・アッタカター』(一)~(四)、春秋社(2015~2018)

- 5) 松村淳子『真理のことは物語集—ダンマパダ・アッタヴァンナナー』(一)～(四)、国書刊行会
- 6) 齊藤和子[1972]「ダンマパダアッタカターの資料的意義」『仏教研究』2 国際仏教徒協会 pp.55-72(1972)
- 7) 高橋宏文「ダンマパダアッタカター語義解釈と他法句経類との関連について」『印度学仏教学研究』35-1、日本印度學佛教學會、pp.41-43(1987)
- 8) 齊藤和子「ダンマパダアッタカターの資料的意義」『仏教研究』2 国際仏教徒協会 pp.55-72(1972)・森祖道『パーリ仏教註釈文献の研究』山喜房佛書林(1984)
- 9) PTS,DhpA,vol. I Preface pp.16-17
- 10) 馬場紀寿『上座部仏教の思想形成：ブッダからブッダゴーサへ』春秋社(2008)
- 11) 森は、現在に伝わるパーリアッタカターは、いわゆる「シーハラ・アッタカター」または「シーハラ・ソース」と総称されるスリランカ上座部マハーヴィハーラ派の古い源泉資料から、註釈者たちが作成したものであると論じている。  
『パーリ仏教註釈文献の研究』山喜房佛書林(1984)・「注釈文献の種類と資料的価値」『パーリ文化学の世界』春秋社
- 12) PTS, DhpA, vol. II 「suppabuddhakuṭṭhivatthu」,pp.33-37
- 13) PTS, UdA, p.289
- 14) 『大正新脩大藏經』(以下『大正』)四 五六四b
- 15) 『大正』四 五八八c-五八九b
- 16) パーリ語ではチューラパンタカ(cūḷapanthaka)と言われる。
- 17) 佛即爲說身三口四意三所由。觀其所起察其所滅。  
仏即ち為に身三、口四、意三の由る所、其の起こる所を觀じ、其の滅する所を察することを説けり。
- 18) DhpAが一つの章に十前後の因縁物語を収めているのに対して、『法句譬喻經』は一つの品に三前後しか因縁物語が収められていない。